国際交流プロジェクト――高知県安田町と黒潮町経験から得た地方創生の新視点

呂亭亭、謝志銘、顔伶真、楊名豪、李佳佳、林杰妮

一、はじめに

2025年8月20日から30日にかけて、台湾と日本の複数の大学から集まった学生たちが、日本・高知県で開催された「地方創生GLOBAL × LOCALキャンプ」に参加した。本プログラムには、台湾側の国立台湾海洋大学・国立高雄科技大学・国立暨南国際大学・国立中山大学・国立雲林科技大学の5校と日本側の高知大学が参加した。6校の学生たちは現地調査・地域住民との対話・文化体験を通じて、地方創生の実践およびその様子を体得した。本プロジェクトは、異文化間学習の成果を出しただけでなく、日台の若者が地域の持続可能な発展と社会参加の可能性を再考させる契機ともなった。

台湾側の5校と高知大学の学生が共に参加したサマーキャンプ（黒潮町での集合写真）

二、活動の進展

2021年に「台日大学地域連携・社会実践連盟」（以下、「台日連盟」）が設立されて以来、両国の大学間における学生交流や社会的責任（USR）の実践に関する協力は着実に深化してきた。

高知大学は若者が「地方創生」の実情をより深く理解することを目的として、2025年の夏に「地方創生 GLOBAL × LOCALキャンプ」を企画し、台湾の6校と協働して高知県の安田町および黒潮町を中心として活動を展開した。

本プログラムでは、学生たちが「フィールドラーニング × 現地の住民との交流」を方法として、日本の地域コミュニティにおける生活様式や持続可能な発展の取り組みを体験するとともに、異文化・異言語による双方向の協働を通じて、台湾と日本が地方創生の推進における着想の差異や共通の課題を探ることを目指した。

（一）フィールドラーニング：安田町と黒潮地域におけるコミュニティ観察

プログラムの初期段階（8月20日～21日）には、高知大学で歓迎イベント・事前のグループディスカッション・安全講習が行われた。高知大学教員3名の指導のもと、各グループでは日本人学生と台湾人学生がアイデアの発想について討論し、協働の枠組みや研究の方向性を確立した。

8月22日から28日にかけて、学生たちはグループに分かれて安田町および黒潮町に向い、フィールドワークや住民へのインタビューを行なった。

▪ 安田町—廃校から地域集落センターへ

真夏の安田町では、セミが鳴きつつ、ゆずが香っていた。学生たちは農産物直売所・カフェ・海沿いのコミュニティを訪れ、住民が「地産地消」に基づいた持続的な経営を進める姿を目の当たりにした。有機ゆず、アユ、山芋などの土産は食材だけでなく、土地と暮らしをつなぐ文化的象徴でもある。

学生たちは安田町集落活動センターなかやまに滞在した。この施設は高知大学と当地の交流協会の共同運営によるものである。かつては廃校となった小学校であったが、現在は住民の交流拠点・活動センターとして利用されている。

館内には鉄道博物館・映画撮影スタジオ・リハビリケアなど多様な機能が備えられ、地域おこしと文化発信の重要な拠点となっている。学生たちは住民と共に郷土料理を作ったり、浴衣などの伝統衣装の着付け体験したりし、地元の暮らしを体得した。また、こうした和やかな雰囲気の中で、双方が文化交流以外に絆を深めた。

▪ 黒潮町——防災に学ぶ知恵：災害との共生

黒潮町に行った学生グループは、住民の家・商店・町役場を訪問し、防災教育や行政との協働について考察した。町役場の職員は壁にかかっている避難地図を指さして、「住民一人ひとりが最寄りの避難経路を知っています。訓練は形式ではなく、生活の一部なのです。」と語った。この言葉は私たちに強い印象を残した。
黒潮町は長年、津波の脅威に直面しているが、住民と行政の間には強い信頼関係と協力体制が築かれている。とりわけ、市民の防災意識と組織力が防災活動の中で重要な役割を果たしている。行政が指示を出すと、住民はすぐに動員して物資を分配し、避難施設を開設することができる。当該町のレジリエンス（回復力）は感服するほどに高いと言えるだろう。
台湾の学生たちはこれを見て地元のコミュニティにおいて「住民参加」と「災害マネジメント」をどのように強化し、防災を日常生活の一部とするかをより深く考えるようになった。

台日学生キャンプの事前安全講習

学生たちは安田町の住民と共に浴衣着付け体験をし、日本の伝統衣装について学んだ。

学生たちは住民と一緒に郷土料理を作り、地域の食文化について学んだ。

各グループの学生はそれぞれのテーマについて議論を交わし、初期の成果発表を行った。

（二）地方創生の成果発表とクリエイティブな提案

▪安田町チームの提案一覧

テーマ	提案内容	クリエイティビティー
UBER TEA：モバイル茶会交流プロジェクト	シェアリングエコノミーに基づいた発想であり、台湾の学生が「お茶の使者」となって行動し、台湾茶の香りと人の温かさを安田町のコミュニティや家庭に届けるプロジェクト。	「台湾の茶文化＝おもてなし」を架け橋として、住民とのつながりを深める。
中山ボードゲーム	中山地区の土産をテーマにしたオリジナルボードゲームの制作。	教育と現地の農産物のPRを目標に、観光客がカフェや商店に置いているこのゲームを楽しめるとの発想である。
中山ストーリー絵本	住民や自然を主人公とした絵本作品の制作。	絵本の形式を通して地元の人文を描き、地元愛と自然風景の魅力を伝える。
日台文化交流	言語・音楽・文化などをテーマにして両国のつながりを発信し、住民の共感を呼ぶ活動。	文化交流を通して、日台の共通点と差異について対話を促す。

▪ **黒潮町チームの提案一覧**

テーマ	提案内容	クリエイティビティー
コミュニティ共同宿泊計画	台湾のワークエクスチェンジを参考に、外部の訪問者を黒潮町活動センターかきせに受け入れることで、文化交流と地域の助け合いをサポートする。	コミュニティの活性化と地域参加に寄与する。
緊急救助共有ボックス	医療機関へのアクセスが不便な地域の現状を踏まえ、コミュニティ共有の医療ボックスを設置することで、緊急時の対応を強化する。	救援を待つ間に住民が自ら対応可能なことを済み、市民自治とコミュニティ安全を両立させようとする。
世代間共同宿泊	高齢者が短期的に若者にその家に同居させるかわりに、若者が高齢者に付き合い、またその日常生活をサポートするとの提案。	若者が農村生活を体験できると共に、高齢者の孤立を緩和させ、世代間交流を促進する。

以上の提案から学生たちが黒潮町の課題を理解していることが分かるだけでなく、「共有」と「つながり」を核とした地方創生の精神をうかがえる。

三、国立台湾海洋大学の学生がサマー交流プログラムで得た学びと発見

㈠ 生活観察：細かいところまで注意を払う文化

わたしたちは現地での生活経験を通じて日本社会の細かいとこｒに対する配慮に気づいた。日本の食文化では盛り付けや清潔感が重視されるほか、トイレには多くの場合ウォシュレットや室内用スリッパが備えられ、衛生や快適さへの配慮がうかがえる。公共浴場といえば、体を清潔にする場だけでなく、重要な交際の場でもある。また、日本の低層建築や屋上に設置された太陽光パネルからは、社会全体で秩序や環境意識を大切にしていることが感じられた。

日本では、すべての食事がきちんとした盛り付けで提供される。

（二）高齢化する町に向き合う：温かい「付き合い」—特別な地域実践

訪問先の安田町と黒潮町は台湾の多くの過疎地域と同様に、人口流出や高齢化といった課題に直面しており、私たちは当地の高齢化を身をもって実感した。学生のわたしたちにできることは些細であるが、言語の壁を越えて高齢住民の皆さんにわたしたちの配慮・敬い・活力を伝えた。こうして、住民に良いエネルギーを与えて交流を思い出すと、温かさと感動を覚えさせたかったのだ。また、より多くの人に「付き合うこと自体が地方創生である」と知らせていきたい。

（三）台湾と日本の「地方創生」における着想の違い

本プログラムを通じて、台湾と日本の地方創生における着想には差異がることに気づいた。台湾では「どうして地域の経済価値を高め、若者を呼び込むか」に重きが置かれる傾向があるのに対し、日本では「既存のコミュニティが自ら持続可能な発展を遂げるように支援すること」に注目される。台湾の地方創生は新しいものを生み出し、スピード・革新を強調しがちであるため、地域住民とのつながりが薄くて実際のニーズに応えかねる場合もある。一方、日本は細部に着目し、地域の実際かつ具体的な課題に臨む姿勢である。この「穏便かつ着実」な姿勢を目にして地方創生は単なる開発行為ではなく、人・土地・感情を胸にして長期的な経営と着実な理解を重んじる過程であることを認識した。

（四）教室の外で：地方創生と国際交流を再理解する

議論と協働をする中で、参加者全体は努力して他国の異なる考え方を理解し、何度もぶつかり合いつつ、双方が受け入れるバランスを取ろうとした。最終成果の文化展示・絵本・ボードゲームには大きな突破が見られ、外部からの人を惹きつける魅力があり、地域住民に当地の価値を再発見させることになった。

また、チーム生活自体も学習の重要な一環であった。日台の学生は母語ではない英語でコミュニケーションを取って交流し、共に毎日の食事を準備し、夜にはその日の課題や改善点について話し合った。これにより、異文化理解が深まり、チームワーク力も養われることができた。

以上をもって、今後は台湾・日本双方が積極性やコミュニケーション能力のある学生をさらに選抜し、両国学生間の対話や協働の機会を増やすよう提案したい。このようなプログラムを契機に、学生たちはコミュニ

ティの現場で「地方から発信する」クリエイティビティ—を会得し、文化面・実践面で共に進める方向を見出すことができるだろう。

四、まとめに

本活動は、日台学生間の短期交流にとどまらず、日本地方のコミュニティの日常に参加できる「没入型実践」の場となった。安田町や黒潮町のフィールドに足を運び、高齢化・防災・人口流出といった課題を目の当たりにしたのだ。さらに特筆すべきなのは、私たちが単に「観察」に留まらず、積極的に「行動」したことである。安田町の「UBER TEA」モバイル茶会・地域ボードゲーム、または黒潮町の「コミュニティ共同宿泊」や「緊急救助ボックス」などの提案は若い世代による地域活性化に対するクリエイティビティーと人間的な配慮を示している。

今回の交流で得た最も貴重な示唆は、学生たちが両国の「地方創生」における核心的着想の差異を体感できたことである。台湾モデルは「外から内へ」を考えて経済効果や革新スピードを重視する一方、日本モデルは「下から上へ」のアプローチを取り、地域の実際のニーズに応える姿勢である。また、今度では「付き合うこと自体が創生である」場合もあることや、「人」を大切にする心は、施設の整備よりも強い結びつきを生むことに気づいた。したがって、わたしたちは人と土地の関係について深く考えることができ、今後の日台双方の持続可能な発展に向け、強固な信念を持つ温かい若者を育成していくことにする。